

2017年  
12月15日  
金曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

# 祝福の逆説 （「経済学と聖書」第10回から）

宗教改革を、カソリックに対するプロテスタントの戦いであるかのように単純化することは正しくありません。改革者ルターを動かしたのは、神様の愛を失った教会に対する神様の怒りだったからです。神様から離れ、兄弟を憎み、悔い改めない人間へのプロテスト（抗議）が、彼を動かしたのです（ヨハネの黙示録22・4～7）。

そもそも、宗教改革がキリスト教会の分裂をもたらした、戦争を引き起こし、多くの命をうばったならば、その500周年を祝うことに何の益があるでしょう。

聖書には、拡大する経済格差、世界を脅かすテロや戦争、豊かさや飢餓など、多くのことが語られています。それだけではなく、聖書には、幸福や健康、さらに地球環境についても語られています。また、私たちが神様から離れ、神様なしに、自分の力で、自分のために生きようとする結果、競争に巻き込まれ、大

変なストレスに襲われ、勝者と敗者に分かれていくことも語られています（イザヤ書第60章）。

近年、行動経済学では、幸福や健康は最重要のテーマです。そこでは、物質的な幸福（健康）と精神的な幸福（健康）は分けて考察されます。

本日読むルカによる福音書（6・20～26）では、4つの「祝福」と4つの「呪い」が語られます。今貧しい人たちが、今飢えている人たちが、今泣いている人たちが、今辱めを受けている人たちが、祝福されます。なぜなら、これらの人たちは、現在と正反対の状況を期待することができるためです。今富んでいる人たちが、今満腹している人たちが、今喜ぶ人たちが、今尊敬される人たちは、呪われます。

イエス様の言葉は、多くの解釈を生み出しました。マタイの福音書の著者は（マタイ5・3～12）、貧しい人たちは「心」の貧しい人たちであり、飢えている人たちは

「（正）義に」飢えている人たちであり、泣いている人たちは「この世界」を嘆く人たちだと解釈しました。

そこで、イエス様を取り巻く状況を再現しましょう。ガリラヤで多くの癒しの奇跡を行ったイエス様に、多くの群衆が湧いてきます。そこでイエス様は、群衆と弟子たちの前で、このことばを語りました（山上の説教）。この状況で、「精神的」満足と「物質的」満足の違いはなかったと考える方が自然です。なぜなら、イエス様は、その両方が必要な人々に語っていたからです。

イエス様に不幸を宣言された人々は、この世で生活は安定し、自分の名誉や安全や権力を持っています。この世と深く繋がりが、現状に満足しています。イエス様からみれば、このような人々は、この世に縛られ、この世とともに消滅すべき存在です。重要なのは、イエス様が、貧しい人々を、貧しいゆえに祝福したのではない点です。もしそうなら、状況

の逆転を約束すると矛盾が生じます。貧しい人々は「現在の世」と「来たるべき世」の両方に属するから祝福され、現状に満足しきった人々は、一つの世界にしか属さず、変化に抵抗するから呪われます。

現代世界でも、この2つは恐ろしい緊張関係にあります。この世で一見負けた者や悲しい者は、来たるべき世で、既に勝利するのです。

「現在の世」と「来たるべき世」をつなぐ力は何でしょう。それは「希望」だと思われれます。希望のないことは、如何に貧しいことでしょうか。

希望のない「愛」も、希望のない「信仰」も力を失うでしょう。高い希望が人生を変え、社会を良い方向に変える原動力になるのです。みなさん、どうか毎日、聖書に親しんで下さい。

（本稿は、12月15日の内容を中心に、9回の「経済学と聖書」のチャペルの内容の一部を取りこんで、再構成したものです）